

けがれなく音が舞いおどるかと思えば、おそるべき死の淵へと沈んでゆく……円熟期シューベルトの“明暗”を、河村尚子さんは3月の〈第一夜〉でじっくり再現してくれました。

その世界を、さらに惜しみなく濃密につめこんだ〈第二夜〉。最後となる2つの大ソナタを柱に、3種類の個性的な小品が組みあわされています。現代の楽器で200年前のリアルを蘇らせてくれるピアニストとともに、私たちも今宵、答えのない心象の旅路をゆきましょう。

「楽興の時」第3番へ短調 D780/3 Op.94-3

ふつうの市民が家庭でさかんにピアノを鳴らす時代だったから、むずかしいソナタよりも手軽な曲集が好まれた。1823年の末にザウアー&ライデスドルフ社が「クリスマスの贈り物」と銘うって5人の作曲家による小品をあつめた『音楽アルバム』もそのひとつ。そこに「ロシアふうの歌 (Air russe)」と題されて取められたのが本作である。そのあと曲が書き足され、5年後に6曲セットが世に出た。その名も『楽興の時=音楽的な瞬間 (Moments Musicaux)』。出版社が思いついたタイトルと思われるが、きっとシューベルトも「すてきだね」と言ったにちがいない。音の湧きで、その瞬間をとらえたような2分間だから。

「3つの小品」より第3番ハ長調 D946/3

『3つのピアノ小品 (Drei Klavierstücke)』は、独立した3作をまとめて出版したおりにブラームスがつけたタイトルである (1868年)。自筆譜では最初の2つ (変ホ短調+変ホ長調) がひとつづきとなっていて、この第3番だけは別の紙にのこされている。だがその軽やかな調子は、曲集を閉じるフィナーレにぴったり。小気味よいリズムにのって、音が自在にたわむれていくような……ドイツ語でいう「遊戯 (Spiel)」のあり方だ。

三大ソナタへ

小品もすばらしいけれど、シューベルトの本分は終わらない旅路をえがくことにあった。ソナタでは初の出版となる三連作 (D845, 850, 894) を世に問うてから2年後、亡くなる年の春にふたたび「三部作」プロジェクトが始動する。3曲は100ページにわたる紙束に浄書されたが、スケッチは格闘の跡をつたえている。ハ短調ソナタ (D958) が独立して構想されたいっぽう、同じ紙束にスケッチされたイ長調 (D959) と変ロ長調 (D960) は同時進行で、それぞれ影響しあいながら筆がすすめられようのだ。つまり最晩年の心象をひととき強く刻み込んだのが、本日の二作である。

これほど長大なソナタを出版する望みはかなわず、死後10年を経て、三作はディアベリ社からR.シューマンへの献辞つきで出版された。これらをシューベルトは、亡くなる年の秋にみずから人前で弾いたという。最後の花を咲かせるような活動で疲れきったのだろう。移り住んだ兄のアパートを終の棲家として、2か月後に世を去った。

ピアノ・ソナタ第20番イ長調 D959

ハ短調ソナタ (D958) が「悲劇」であったとするなら、これは「遊戯」だ。さきほどの D946/3 にもつづる“自在な音のたわむれ”が、前半をいろいろどっている。しかし、これは思慮ぶかい遊戯といわなくてはならない。浄書譜の段階でいちばん大がかりな書き直しがなされたのが、このソナタの提示部であるからだ。

第1楽章の生命の源は、弾力をもってジャンプする音型 (これも推敲の段階で加えられたものだ!)。シューベルトがのこした、もっとも自由で快活な音楽といえよう。展開部の後半 (中央あたり) をのぞくと、短調の和音もほとんど姿をみせない。

第2楽章で、短調の力がいっきに放出される。この嬰へ短調という調はきわだって濁った響きを生じたため「すぐに長調の憩いに焦がれる」と理論書は伝えているが (1806年)、それに反してシューベルトは執拗にこの暗さを反復する。激烈な中間部を、ピアニストのA.ブレンデル (1931〜) は「熱病の痙攣」と評した。

第3楽章では日常がもどってくるが、前楽章の下行パッセージが——まるでトラウマのように——くりかえし回帰することで、ダンスは断ち切られる。光と翳のコントラストが、刹那のうちに交錯するのだ。

第4楽章で、はじめの弾力と遊戯がやっともどってくる。最後に打ち鳴らされる6つの和音は、第1楽章の冒頭をそっくり反対の順序で鳴らしたものだ。大きな円環をへて、さすらい人はまた足どり軽く旅立ったのだろう。

即興曲集より第3番変ト長調 D899/3 Op.90-3

前半とは変わって、ここからは“歌”の世界へ——。

気ままに楽想をひろげていく「即興曲 (アンプロンプチュ)」の流行をうけて、シューベルトは亡くなる前年に4曲からなる即興曲集を2つ作った (D899とD935)。すべてを世に出すことを望んだものの、生前に出版されたのはD899の最初の2曲だけ。当時もとめられたのは、もっと軽い作品だったのだ。第3番では、この上なく清らかなメロディが、ピアノでは先例のみあたらぬ——トが6つも付く——くぐもった調で奏でられる (それゆえ、死後の初版譜では#1つの調に変えられた)。天と地を往還するような深い抒情は、最低音へとおちてゆくラストの数十秒に凝縮されている。

ピアノ・ソナタ第21番変ロ長調 D960

それまでの二つのソナタで、悲劇をくぐりぬけてまた旅へという航路をたどったシューベルトは、「歌」に答えをみいだした。ぶっきらぼうな動機法をベートーヴェンが追求してきたことを思うと、この最終作でシューベルトがみいだした新スタイルは革命的であった。歌を胸に、さすらい人は荒野を歩む——これなくして、後世の音楽 (たとえば円熟期ブラームスの室内楽) はなかっただろう。

第1楽章の「きわめて温和に (モルト・モデラート)」という指示は、このジャンルではただ1回、《幻想ソナタ》(D894) にしかみられない。開始20秒ほどで歌を寸断するトリルの遠雷 (変ト音) は、当時のピアノの最低音すれすれの音であり、じつは先ほどの《即興曲》(D899/3) の主音でもある。ピアニストは音のサブリミナルな (=意識下の) つながりをも考えぬいて選曲するのだ。

第2楽章のテクスチュアは弦楽四重奏曲を思わせる。「変ロ長調」からありえないほど遠い「嬰ハ短調」で書かれている。これはシューベルトが「孤独」や「さすらい」の表現にしばしば用いた調で、先行楽章でもはっとさせるかたちで出現した。冒頭のテーマ型は、「罪」や「祈り」をうたう後期作品でよく顔をだす。

第3楽章では、世の多くのスケルツォ楽章と同じく活力が回復されるが、そのテーマの輪郭は第1楽章の冒頭テーマをなぞったもの。ここでも果てしない旅が変奏されているのである。

第4楽章のラストでは、冒頭楽章で異界をよびこんだ「変ト音」が「ト音」に解決されて終わっている。旅人は安らぎを得られたのだろうか。このあと、イ長調ソナタ (D959) のようにまた新たな旅へ出かけるのか、それとも《冬の旅》のような永遠の閉域を生きるのだろうか? ——今宵、ゆっくり問い直すことにしよう。